

（論文）

パーソンズとシュンペーター 合理性をめぐる出会い

大 黒 正 伸

1. はじめに

タルコット・パーソンズ（1902-1979）の社会理論は、およそあらゆる科学がそうであるように、分析的理性に基づいている。彼の社会学は、当初から抽象的な「行為の一般理論」の構築を目指していた。この一般理論に基づいて、社会学を同時代の隣接する人間諸学と連携させるという壮大な計画を進めていった。そこには、生物学や通信工学から精神分析、カント哲学にいたる極めて多様な学問が含まれていた。本稿は、そうしたパーソンズの意欲的な探求のいわば「原点」を探る試みである。本稿はまた、拙著「タルコット・パーソンズの社会理論における合理性概念の位置」[大黒 2005] を補足すると同時に、その思考前提を再検討する試みでもある。

パーソンズの学術的な経歴は、経済学者として始まった。ただ、少なくとも当初は「非正統的」な流れに与していた。彼はアマースト・カレッジでの学部学生時代、ウォルトン・ハミルトンとクラレンス・エアーズといういわゆる制度学派に属する論者の下で学んでいた。彼は早くから「漠然とした意味での」社会学に関心があったこと、ただし当時のアメリカの社会学には違和を感じていたことなどを、後年漏らしている [Parsons 1970/1977]。その後、短期ながらイギリスとドイツで学ぶうちに、社会学へとますます関心が傾斜することになる。彼は、まず資本主義理解について、ドイツ歴史学派の意義を認め、マックス・ウェーバーに接近する。資本主義の「非経済学的」「理念的」要素の分析を志すのである [Parsons 1928] [Parsons 1929]。その後、パーソンズは「経済学における社会学的要素」の発見へと進み、1937 年にその記念碑的大作『社会的行為の構造』[Parsons 1937] を公刊した。そこまでのパーソンズは、「初期パーソンズ」と呼ばれることが多い。

この「初期」こそ、筆者はパーソンズの社会理論の科学的基礎が整えられた時期であると考えている。それはまた、40 年以上にわたるハーヴァード大学での教職生活において、経済学者から最も多く影響を受けた時期でもある。そこでは多くの優れた知性との邂逅があったが、本稿でとりあげるヨゼフ・シュンペーターとの出会いは、実はそれほど注目されてきたとは言えない。そもそも、パーソンズと経済学者たちとの関係についてもそれほど研究が多くは

ない。それには、まずは彼が社会学者であること、それも 20 世紀を代表する偉大な社会学者であることが原因しているだろう。彼は膨大な量の社会学的論争に関わっていたし、死後ですらなお関わっている。社会学の研究者たちがパーソンズ初期における隣接社会科学からの具体的な影響についてまで手が回らないとしても不思議ではない。

しかし、筆者はこの初期の経済学者からの影響を重視したい。筆者は、パーソンズの理論化作業にある分析的な性質を徹底することで「方法」としてパーソンズの理論を再生させることを目指してきた。この文脈においては、経済学の位置は重要である。その理由は第一に、両科学が現実の科学であると同時に抽象的な一般理論を必須前提とすることにある。少なくとも、パーソンズ自身はそう考えた。第二には、それが人間行為の科学であることにある。本稿が問題にする合理性とは、人間行為の合理性である。初期パーソンズ当時の「正統派」経済学はもっぱら目的-合理的行為に中心があったものの、パーソンズは通常そこからの「偏奇」と見られる行為（たとえば、宗教）をも射程に収めようとした。彼は「行為の一般理論」を構想し、むしろ合理的ならざる行為こそ彼の社会学の中心テーマになっていくのである。第三は、それと関連して、パーソンズが総合的な社会学を目指したことである。1950 年代以降のパーソンズ社会理論の中心は「社会システム」という概念であるが、これは人間社会を機能分化した複数の下位システムから成る全体として捉えるものである。経済という人間活動は、そうした社会システムにおいて必須の機能を果たす重要な下位システムである。

経済学から社会学へと立場と関心とが移っていくについては、様々な問題と葛藤があったことが伝えられている [Parsons 1970/1977:22-33] [Camic 1992]。1930 年代から 1950 年代にかけてのパーソンズの理論展開において、シュンペーターとの出会いが一定の役割を果たしただろうことは想像される。しかし、その事柄の詳細をこうした小論で論じ尽くすことはできない。本稿は、パーソンズとシュンペーターが共同の論題について定期的に会合を持った「合理性セミナー」と呼ばれる活動に注目する。

会合の詳細は以下の章に譲るが、ハーヴァード時代初期の若きパーソンズが晩年にさしかかった大家であるシュンペーターと研究会を持ったことの意義は小さくはない。しかし、この会合は、リチャード・スウェドベリの編集によって出版されたシュンペーターの合理性論考以外には、公刊物という点ではさしたる成果をあげなかった。そこにはいささか人間関係にまつわる要素が関連しているかもしれない。

いずれにせよ、人間行為の合理性をめぐる 2 人の知性の出会いがいかなるものであり両者の意見の異同はいかなるものであるかは、パーソンズの知的な発展の伝記的な関心を越えて、社会科学の方法論の歴史という文脈においても瑣末な話題ではないように思われる。以下では、「合理性セミナー」の経緯を一瞥したあと、合理性という概念についてパーソンズとシュンペーターとの相違点を論じつつ、パーソンズが求めた社会学的方法的な特徴を探りたい。

2. 「合理性セミナー」の背景

2.1 ハーヴァード時代初期のパーソンズとシュンペーター

パーソンズとシュンペーターは、シュンペーターが 1927 年に客員教授としてハーヴァードに来たとき出会っている。パーソンズは大学院でのシュンペーターの講義に出席した。彼は、「理論の体系という概念を最初に得た」のはシュンペーターからだったことを後に明かしてい

る。さらにはシュンペーターから「理論科学」としての経済学を学び、当時の自分がそれに近いところにいたことを述懐している [Parsons 1959:6]。

パーソンズは、ハイデルベルク大学から博士の学位（1929）を得たあと、ウェーバーとフランスの社会学者エミール・デュルケムに加えて、経済学思想と文献を読解することで、自らの社会学を模索した。彼はまず、アルフレッド・マーシャルについて研究論文を出す。彼は、マーシャルの思想の内にウェーバーから得た資本主義の道徳的な側面を見出そうとした。パーソンズにとって、ウェーバーとマーシャルは資本主義の道徳的な性質について収斂する。マーシャルは「富の学」と区別された「人間の学」の存在を提唱し、近代人の「性格」の進歩を展望していた。マーシャルの「活動」という概念は、パーソンズにとっては自らの目指すべき社会学へと収斂していくように思われた [Parsons 1931] [Parsons 1932/1991]。また、パーソンズはこの時期からヴィルフリート・パレートの思想にも注目した [Parsons 1970/1977:24]。

しかし、このハーヴァード時代の初期ですでに、パーソンズは経済学における研究と経歴について見切りをつけつつあった。シュンペーターは1932年に正式にハーヴァードの教授に就任したのだが、一方のパーソンズはその前年に新設の社会学科へと移動していた。とはいえ、いまだ終身在職権（tenure）がなく、研究面でも経歴の面でも不安に満ちた状況だったようである。パーソンズ自身の回想からもこの時期の困難な状況は想像できる。パーソンズは「私が9年間もインストラクターの地位にあったことは」、「当時としても異例のことだった。私に好意的でない学科長」（つまり、ピトリム・ソローキン）の下にいたことは「不幸なことだった」と述べている。1936年に助教授に昇進したのも、社会学科外部の教員（経済学者のE・F・ゲイなど）の推薦によるものだった [Parsons 1970/1977:29]。

スウェドベリによれば、パーソンズはシュンペーターの崇拝者だった [Swedberg 1991b:169]。少なくとも1930年代におけるシュンペーターとの関係はたいへん良好だった。パーソンズは最初の大作『社会的行為の構造』を刊行するのだが、その準備草稿にあたるものをシュンペーターは回覧している。シュンペーターのこの草稿に対する好意的な報告が資金助成に係るハーヴァードの委員会に提出された [Swedberg 1991b:220-221]。シュンペーターは、フランク・ナイトとともに、『社会的行為の構造』に対する最初の評者になった。その後も研究上ではシュンペーターに加えて、フランク・W・タウシグ、エドウィン・F・ゲイ、そして学外ではナイトなど経済学者との交際が続いていたが、それでもパーソンズの関心と理論は社会学へと移っていく。彼の学問的志向は、ハーヴァードではその後もしばらくは困難な道を辿ることになる。

他方のシュンペーターは、1939年に大著『景気循環論』を書き上げたものの、ジョン・M・ケインズの『貨幣、利子、および雇用の一般理論』の衝撃があまりに大きく、自著に対する一般の評価に不満であった。加えて、ドイツとアメリカでの教育に対する大学当局の方針の違いに戸惑いがあったようである。特に、ハーヴァード大学当局が学生の「個別指導」（individuell tutoring）を要求してきたことにいらだっていた [McCraw 2007:305]。

「合理性セミナー」は、そのようなパーソンズとシュンペーター両者の背景の下に始まった。両者の年齢差は19年ある。このセミナーは、大家の到達した経済学と少壮理論家の模索する社会学とが会おう場になった。

2.2 初期パーソンズと「合理性セミナー」の経緯

パーソンズの求めた「社会学」が、当時としては「非主流」だったことは彼自身が認めている。それは、具体的な調査に基づく経験的な一般化よりも、むしろ先験的な一般理論を準備することに力を注ぎ、さらには隣接する諸学科との連携を探るというものだった。1944年によく社会学科長になったものの、パーソンズはそれを新たな「社会関係学科」(1946-1970)において追究することになる。

とはいえ、1930年代のパーソンズは経済学から離れる決意をしたにも関わらず、その「方法的」方針は古典派経済学に類似したものだった。少なくとも、抽象的な一般理論の構築という方向では一致していた。当時のパーソンズの理論的特徴は、第一には対象領域として非経済的、没合理的、または理念的な人間行為を含むこと、第二にはそれを合理的な自己利害に還元しないこと、第三に(上記で述べた)先験的で抽象的な一般理論を前提とすること、これらである。

パーソンズが正統派(新古典派)経済学と決定的に異なるのは、おそらく上記の「第二」の特徴であろう。彼は、『社会的行為の構造』(1937)において、功利主義の思想伝統を批判的に検討している。その第一の論点は、人間行為を自己利害の合理的追求に還元することの拒否だった[cf. Parsons 1937:165]。その後、合理性そのものを自己利害の追求とは別の次元で論じることへと向かう[Parsons 1970/1977:37-40]。それは、知識の合理性と手段の合理性の分析的な区別につながるのである[大黒 2005:119]。

他方のシュンペーターは、「社会科学における合理性の問題」についてつとに関心があった。しかし、彼自身、いまだに満足の得られる議論がなされていないという認識を持っていた。1939年の秋に、シュンペーターは、社会科学における合理性に関してハーヴァードで小さな教員セミナーを開いた。「シュンペーターは、この種のセミナーを組織することを楽しんでいたようであり、合理性に関するそれは彼の関わった唯一のセミナーではなかった。最初の会合は、おそらく1939年の10月末に行われ、セミナー全体の終了は1940年の5月であった。；全体をつうじて、おおよそ12回の会合が開かれた。シュンペーター以外には、タルコット・パーソンズとD・V・マグラナハンの2人が中心人物だった」[Swedberg 1991a:68]。

このセミナーに関する最初の案内状の下書きがシュンペーターの手書きで残っている。そこに書かれていた名前は様々な分野の人々だった。会合の正確な日程と会場、また実際に出席し報告した人を正確に特定することはほぼ不可能であるが、スウェドベリの調査とハーヴァード大学文書館(the Harvard University Archives、以下ではHUAとする)に残っている資料から見て、以下のような整理ができるだろう。

スウェドベリによれば、1939年1月6日付けのバーナード宛の手紙でシュンペーターは合理性セミナーのアイデアを述べている。その後、1939年9月～10月にかけてシュンペーターがセミナーの案内状を発送し、1939年10月にセミナーが始まった。初回の会場は、上記の案内状によれば、10月27日金曜日午後4時、アダムス・ハウス G23にあるパーソンズの部屋ということになっている[UAV 349.11, Box 21]。

案内状の宛先は、原文によれば、“Dr. Overton Taylor, Dr. Paul M.Sweezy, Professor Leontief, Professor Haberler, Mr. A. Bergson, Mr. Dunlop (以上は経済学者), Prof. Crane Brington, Mr. Lincoln Gordon, and Dr.Pettie” 以上である。呼びかけた側の中心人物は、シュンペーター、パーソンズ、デイヴィッド・V・マグラナハン(心理学)だった。その他の

多少「恒常的な」メンバーとしてスウェドベリが挙げたのは、エイブラム・バーグソン、ジョン・ダンロップ、ワシリー・レオンチェフ、ウィルバート・ムーア、ポール・スィーザー [Swedberg 1991a:68]、ゴットフリート・ハーバラー [Swedberg 1991b:126] である。

HUA の資料も含めて整理すると、以下の表のようになるだろう。

<表 1>

案内状の宛名(HUAの手書き原稿の記載と順序)[UAV 349.11]	Swedbergの言及 [Swedberg 1991a, 1991b] (順不同)	HUAにあった手紙 (フォルダの順序どおり)	HUAにあったレポート (フォルダの順序どおり)
Overton Paul M.Sweezy Leontief Haberler A. Bergson Dunlop Crane Brington Gordon Pettie (呼びかけた側) Schumpeter Parsons	A. Bergson J. P. Dunlop W. Leontief W. E. Moore P. M. Sweezy G. Haberler (中心者) Schumpeter Parsons McGrannahan	J. P. Dunlop, G. Haberler, D. V. McGrannahan, W. E. Moore P. M. Sweezy, R. Waeler,	Parsons Schumpeter (Pettie) W. E. Moore Schickele McGrannahan

会合は 1940 年 4 月までに 12 回開催され、シュンペーター自身の報告は 1939 年 10 月 27 日と 11 月 13 日の 2 回にわたる。そうするなか、1940 年 5 月にシュンペーターとパーソンズとマグラナハンで出版を決めたものの、最終的にそれは実現しなかった。パーソンズの回想によれば、その経緯はこうである。「幾度か会合をした後、彼（シュンペーター：引用者補足）は私に、そのグループで本をまとめてはどうかと言いました。彼と私とは、共著者ではないまでも、少なくとも共編者になるべきとのことでした。その申し出を少なくとも直ちに拒否したわけでは特別なのですが、私の記憶では、私はむしろ冷淡に応じました。そして、実際のところ、それは立ち消えになりました [Parsons 1970/1977:32]。」

回想では「冷淡」と述べているが、手紙の文面ではパーソンズは熱心に原稿の提出を参加者たちに求めているように見える [HUGFP 15.2, Box 21, Rationality Group]。出版についての最後の手紙であろうものが 1941 年 3 月 2 日のパーソンズからムーア宛てとして残っている。そこで、パーソンズはシュンペーターに論文提出者が少ないことを述べている。HUA に残っているレポートは、（一つはレポートではなく議論の整理であり、ペティのものかどうか不明⁽¹⁾なので除けば）5 人である（上記表 1 を参照）。本稿では、主にシュンペーターとパーソンズのレポートを採りあげるが、必要に応じて他のテキストも参照する。

3. 合理性をめぐる議論

3.1 シュンペーターの合理性論考

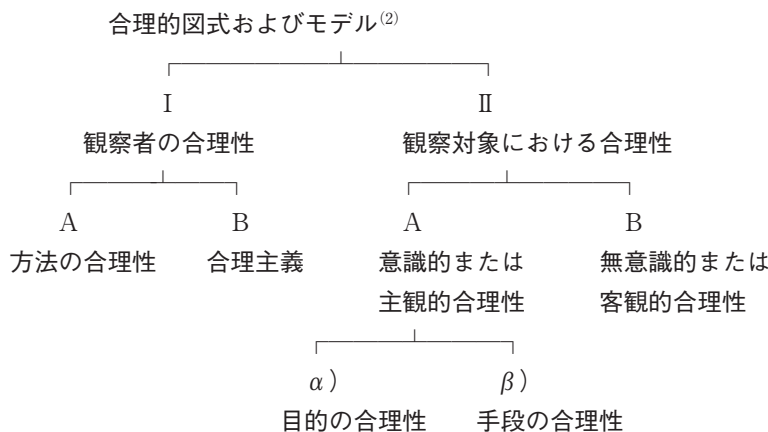
シュンペーター自身はパーソンズに「社会諸科学における合理性の意味」と題された草稿を提出した。この草稿完成の日付は 1940 年の 6 月 12 日であるが、スウェドベリによって

HUA から発掘され、一部は 1984 年に公表された。その後、全文が 1991 年にスウェドベリ篇の論文集の一章として刊行された [Schumpeter (Swedberg) 1991]。以下では、このスウェドベリ版を参照する。

この 1940 年の論考においてシュンペーターは、2 種の「風変わりな区別」[Swedberg 1991a:69] を導入している。ひとつは「観察者の合理性」と「観察対象の合理性」との区別であり、もうひとつは「主観的ないしは意識的な合理性」と「客観的ないしは無意識の合理性」との区別である (図 1) [Schumpeter (Swedberg) 1991:323]。

「観察者の合理性」は、科学における知的手続きの合理性を意味している。どのような種類の科学研究であれ、当然に合理的でなければならない [Swedberg 1991b:126]。しかし、研究される対象 (人間行動) は、合理的な現象でも非合理的な現象でもあり得る。加えて、合理的な対象といっても、その合理性は「主観的・意識的」でも「客観的・無意識的」でもあり得る。「客観的」とは、社会科学の対象である彼ないし彼女がそれと意識していないのに、合理的 (と見なされる) 現象が観察される場合である [Schumpeter (Swedberg) 1991:319-320]。

<図 1>



シュンペーターは、経済学者たちが「客観的合理性」と「主観的合理性」の区別を曖昧にしていること [Swedberg 1991a:68-69] を、またここで言う「主観的」合理性すなわち「自覚的な」合理的行為をもっぱら前提にしてきたことを問題視する。パーソンズと同様にシュンペーターもまた、社会現象すべてを合理的なものだとは考えていなかった。ただ、スウェドベリによれば合理的行動と非合理的行動との線引きにシュンペーターも関心があったとのこと [Swedberg 1991b:126] だが、この論考では合理的／非合理的という区分に対する詳しい議論がなされていない。合理性からの逸脱についてはほとんど語らず、むしろ合理性のモデル化という手続きについて多くが語られる。

シュンペーターは、観察対象 (すなわち社会的行為者) の側で無自覚な合理的現象を発見するべくそうしたモデルが活用されるべきであると述べる。それは、手続きとしては自然科学と何ら変わらない外見を持っている。この客観的合理性の例として、彼は、総生産量・価格水準・利子率・要求払い預金の組み合わせから成る一定の理論をあげる。ここには「直接には人間行動についての何らかの仮定を含まないか、少なくとも含ませる必要がないが、なおかつ意味のある経済的帰結を導くことのできる、客観的に観察できる数量」が存在すると

述べる [Schumpeter (Swedberg) 1991:320]。シュンペーターが挙げた他の例も、もっぱらマクロ経済的現象である。エミール・デュルケムをはじめとする社会学者が伝統的に述べてきたような「道德」ないし「理念」といった集合的現象をそこに入れてはいない。それが「合理的」と呼び得る否かについて検討してもいい。シュンペーターの言い方を借りれば、社会科学における対象は「観察者の合理性を通して理解された対象の合理性」[Schumpeter (Swedberg) 1991:322-323] である。つまりそれは、「合理的観察による合理的モデル」の発見的な権能を表しているに過ぎない。

シュンペーターの言うところの意識的合理性に、ウェーバーが言う「価値合理性」が含まれるようには思われない。関連する面があるとすれば、それは「目的の合理性」（上記図1のⅡAの α ）であろう。しかし、シュンペーターも認めるように、経済学の対象はもっぱら「手段の合理性」（ⅡAの β ）である。意識的合理性にしても、経済学的主要事例に即した、極めて限定的な議論になっている。

以上のようなシュンペーターの議論は、合理性をめぐる議論に対してそれほど新しい貢献があったとはいえない。とはいえ、彼が導入した主観的／客観的という区別は、まったく意味のないものではない [Swedberg 1991b:127]。この論考より遅れて、経済学および周辺科学は、人間の合理性に対してより柔軟な議論を生み出していった。サイモンの「限定合理性」から近年の行動経済学にいたる議論の展開は、シュンペーターの問題意識が先駆的な意義を有していたことを示している。

3.2 パーソンズの合理性論考

パーソンズは、この「合理性セミナー」以前に、『社会的行為の構造』において彼なりの合理性議論を展開していた。初期パーソンズの行為理論においては、合理性はあくまで「行為の分析的要素」どうしの「関係様式」として扱われている。彼は行為を、目的、手段、条件、規範という分析的な要素に分けることから行為理論の構想を開始した。こうした要素を含む最小の行為モデルは、「単位行為 (unit act)」と呼ばれる。手段は行為者によって制御できる要素、条件は行為者が制御できない要素として考えられる。目的と手段の関係のあり方が、規範という要素である。そこには行為者による主体的な手段選択という前提が想定されている。彼はこの図式を「行為準拠枠」と呼んでいる。

パーソンズの提唱した一般的な行為理論は「主意主義」と呼ばれる。目的と手段とを一定の規範に従わせるには行為者の意志的努力が前提されるという意味が、そこに込められている。ただ、行為準拠枠の分析的要素は、極めて抽象的な存在である。それは、以下のような構成になっている（図2）。

<図2> 主意主義的な単位行為の多元性と象徴性

単位行為 (Av) = f(条件, 手段, 目的, 規範)
 知識要素 = (科学と誤謬と無知)
 理念要素 = (宗教、道德、倫理、美学その他)

目的 \supset (経験的目的 (定量的・非定性的)、没経験的・超越的目的)

手段 \supset (経験的・本来的手段、象徴的手段)

パーソンズの用語法では、合理性は「規範」なのである。彼は、合理性を目的と手段との「本来的」関係と呼び、分析モデルの基本に据えようとした [Parsons 1935] [Parsons 1937]。「合理性セミナー」に対するその短いレポート「社会的行為における合理性の役割の分析に対するアプローチ」[Parsons 1940 (HUA)]において、知識の合理性の要件として、観察と精密さと一貫性の3つを挙げている。そのうえで彼は、合理的手段選択が「規範的志向」を持つことを指摘している。それは、ひとつには当該手段への理解が上記の3規準を満たすいわば「真理」という規範を前提すること、ふたつには選択肢からの選択が真理と一致すべしという拘束性を持つこと、これらである [Parsons 1940 (HUA) : 1-3]。

しかし、パーソンズは、目的と手段との間には合理的ではない関連の仕方も存在することを指摘する。彼は、目的と手段との「象徴的」な関連という事態を想定する。宗教儀礼は、そうした目的-手段関連の代表例である。パーソンズは、行為を構成する要素として、知識要素（科学知識、無知、誤謬）の他に理念要素（宗教、道徳、など）をも想定する。そうした要素は本来的な合理性からの偏倚と言えるものの、非合理性（irrationality）とは異なるものである。パーソンズは、こうした要素の性質を「没合理的（non-rational）」と呼んでいる。彼の行為理論の基本図式には、合理／非合理／没合理という三元区分が含まれる [大黒 2007]。

こうして見ると、パーソンズの関心は、合理性そのものに限られるわけではなく、合理性を必須の要素として含む行為の一般理論にあった。彼は、合理性からの「逸脱」を詳細に論じる志向をつとに持っていた。「合理性セミナー」に対するレポートにおいても、パレートの「論理的行為」と「非論理的行為」という区別を参照し、合理／非合理という従来の二分法を相対化しようとした [Parsons 1940 (HUA) : 7-9]⁽³⁾。

この行為準拠枠ではまた、目的と手段は相対的な関係にあり、一連の「連鎖」を成している。ある行為で目的として想定される事柄でも、もっと大きな（高度な、または広い）別の目的の「手段」かもしれない。そして、分析的な想定として、そうした連鎖の一方の側に「究極的目的」を、他方の側に「究極的手段」が置かれる。究極的目的とは、いかなる目的の手段でもなくそれ自体が目的そのものであるという意味であるが、涅槃や永生などという超越的なないしは宗教的な目的がそれにあたるとされる。分析的な想定とはいえ、究極的な目的は上位の目的を持たないがゆえに、「本来的」な規範としての合理性とは異なる次元で設定される。

シュンペーターは上記のような連鎖の想定を分析的手続きとしては肯定する⁽⁴⁾。しかし、シュンペーターは目的そのものの議論に入ることはなかった。マクロ集計的な現象を客観的「合理性」の例として挙げるシュンペーターは、パーソンズのいう「本来的」な目的-手段関係をモデル化の原則としていて、それこそが社会科学の方法であると考えているように思われる⁽⁵⁾。パーソンズは、古典派経済学を含む功利主義の伝統が、目的そのものの議論を回避して手段選択の論理を中心に論じてきたことを指摘している。そして、そうした手段選択の規範は、もっぱら本来的な目的-手段関連、すなわち合理性によって考察されてきた。パーソンズにとって、功利主義は行為の「手段の合理性」に偏った議論に陥っている。上で述べたように、目的の議論こそはパーソンズの行為理論にとって重大な分野だった。

4. 結び

4.1 その後のパーソンズにおける合理性

スウェドベリによれば、「合理性セミナー」の後、パーソンズとシュンペーターとの学問的な接触はもう1回あった。1948年のアメリカ経済学会年次大会における「共産党宣言百周年」円卓会議がそれである。パーソンズは、この会議で「社会階級」をテーマに報告した [Swedberg 1991a:72, 1991b:169]。社会階級をめぐる議論においてパーソンズは、近代社会における「階層分化」が「自己利害」の追求だけで説明できないことを指摘する [Parsons 1949/1954:324-325]。パーソンズは、多面的な社会階層論を踏まえたうえで、合理性についても独自の展開を遂げていった。それは、「専門職 (professions)」をめぐる議論である。

医者などのように公共性が高いうえに高度の技能を必要とする職業は、自己利害と合理性が必ずしも一致しない。少なくとも、過度に自己の利益を追求しないよう要請される。こうした専門職に、パーソンズは、近代産業社会における合理性の「機能分化」を見る。自己利害に寄与する「手段の合理性」だけが社会的行為の合理性ではない。「知識の合理性」は、もちろん自己利害にも役立つが、公共の利益にも役立つ。医師と患者の関係は、まさにそうした専門職の社会的行為システムを代表するものだった (cf. [Parsons 1951:447f.])。

そうした公共性や社会の道徳的な統合という「理念」の局面こそ、パーソンズが最も注目した近代社会の性格である。それは、パーソンズが経済学者から社会学へと転身するについて最も大きく寄与した「存在論的」な問題意識だった。存在論は認識論と方法論に密接な関連を持つ。シュンペーターとパーソンズとは、結局それぞれ独自の道を歩んだ。パーソンズは後日、「合理性セミナー」が自分のなかで経済学と社会学の分岐点だった可能性を示唆している [Parsons 1970/1977:32-33]。その後のパーソンズは、行為準拠枠という行為の抽象的な図式から「行為者 - 状況」関連に視点を移動させることで具体的かつ学際的な議論へと進んだ (cf. [Parsons 1951])。そうする過程で、彼は心理学と文化人類学に接近し、ついにはジークムント・フロイトの精神分析すら採り入れるに至る (cf. [Parsons 1964])。パーソンズは、客観的な合理性の例としてシュンペーターが引用した定量的な現象からますます離れていくのである。

いずれにせよ、パーソンズは「合理性セミナー」を結局「流産」させてしまった。事の真相は今となっては判然としないが、経済学者として合理性の発見的なモデルに議論を収斂させていくシュンペーターに対して、没合理性を含む目的 - 手段関連にコミットし続けるパーソンズが社会科学的方法的なスタンスの異なることは見て取れる。パーソンズは、その初期から「合理性セミナー」にいたるまでの時期、方法的な志向と具体的な研究関心は、少なくとも一部ウェーバーのそれを引き継いでいる。すなわち、前者は行為者の主観的見地の重視、後者は資本主義の理念的 (没経済的) 側面への注目、これらである。それはまた、近代社会の歴史的な全体像の探究でもあった。そして、これらはあくまで「定性的」な分析を目標とするものである。

その一方でシュンペーターがアメリカにおける計量経済学の発展に貢献したことは良く知られている。統計技法と電子機器の発達とともに、こうした計量分析という分野は社会科学においてその地位を高めていった。しかし、パーソンズは必ずしもそうした技法を活用したとは言えない。むしろ、数理的な理論化を忌避する志向が見られた。彼自身も経験的調査を

まったくしていないわけではない。参与観察（例えば医療社会学）も質問票調査（例えば教育社会学）も、かなりの規模で行っている⁽⁶⁾。ただ、彼はそうした調査の技法的な側面に対して理論体系における明確な位置を与えていない⁽⁷⁾。

4.2 再び社会学と経済学の収斂を目指して

パーソンズのその後の理論展開は、実はシュンペーターの主張した「観察者の合理性を通じた対象の合理性の発見」という分析方針と共鳴する部分が多い。シュンペーターの死後のことになるが、パーソンズは「社会システム」という概念 [Parsons 1951] を構築し、マクロな社会動態の理論化が目指された。1960年代以降には、近代社会の歴史的な変動の分析を志している⁽⁸⁾。「合理性セミナー」で話題になった客観的合理性の発見を、パーソンズは後期になって実践したと言ってもよいだろう。しかし、彼は計量的な指標を用いることはほとんどなかった。それは、独特の趨勢的な概念化に依っていた。

スウェドベリは、上記のような具体的な接触とは別に、シュンペーターとパーソンズには経済学と社会学との連携について共通の問題意識が見られると述べる。それは、「経済社会学」（それが具体的にいかなる内容であれ）という学問領域に対する肯定的な志向である [Swedberg 2006:74]。パーソンズ自身は後に、ニール・スメルサーとともに『経済と社会—経済学理論と社会学理論の統合の研究』（1956年）[Parsons & Smelser 1956] を著し、本格的に経済学と社会学との「総合」を図ろうとした。それは、社会システムの必須の下位システムとして経済を見るという発想に基づいている [大黒 2011]。しかし、それもまた明確な定量モデルを持たず、複雑なカテゴリーのシステムを構築することに集中していた。

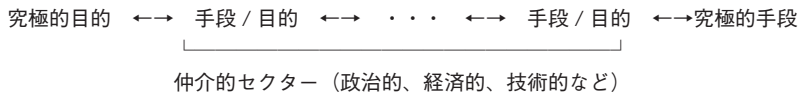
学説や理論というものはそもそも「乗り越えられる」ために存在するのであって、パーソンズのそれも例外ではない。しかし、どの部分ないし側面を、どのように、そしてどこに向かって乗り越えるのかが明確でないと、単なる「排除」に終わる可能性が出てくる⁽⁹⁾。筆者は、以前から「方法としてのパーソンズ理論」ないしは「パーソンズ理論の限定活用」を提案してきた。ルーマンのような社会（学）の「普遍理論」やハーバマスのような実践的な社会哲学をパーソンズのなかに求めるよりは、むしろ社会諸科学ないし人間諸学が「出会う」場としてその分析的な理論図式を解釈する方が建設的であると考ええる。

パーソンズとシュンペーターの共同著作は実現しなかった。しかし、両者は、それぞれの立場で資本主義に対する厳格に経済学的な視点を相対化しようとした。シュンペーターは企業家の創造性とイノベーションによって、パーソンズは専門職の倫理と全体社会システムの象徴的な統合および変動によって、近現代社会に対するヴィジョンを描こうとした。

近年の経済学には、隣接する科学との連携をさらに進めようという動きが見られる。それは心理学や生理学にすら手を広げつつある。一方の社会学は、そもそも学際的な志向を持っていた。パーソンズもまた、生涯をつうじて学際的な理論体系を目指した。現代の経済社会のはらむ複雑な問題群は、人間に関わる諸学の相互の連携を要請している。筆者は、パーソンズとシュンペーターという2人の知的巨人の仕事の収斂させる試みをさらに続けたいと思う。そこから、経済学と社会学との収斂という大きな問題にも新たな形が見えてくるかもしれない。

<註>

- (1) 「合理性セミナー」で行われた各報告を整理した文書（Discussion on the Meaning of Rationality in Action）がHUAに残っている。それは、1939年10月と11月に行われたシュンペーターの報告「経済学における合理性」（Rationality in Economics）に対する討論を中心としたまとめになっている。残っている文書には手書きで“Returned by Pettie”とあるが、これがベティの書いたものかどうか判然としない。シュンペーター自身がまとめた可能性もある。
- (2) 観察者の合理性のうち「合理主義」（I の B）は、スコラ哲学での「合理論」ないしはゲオルク・W・F・ヘーゲルの「理性哲学」のことを指しているようである。
- (3) 目的／手段の相対性と目的／手段の連鎖を図示すれば、以下のようになる。



出席したスウィーージーからは、そうした究極的目的の存在について疑義が出されたとのことである [Schumpeter (Swedberg) 1991:318]。

- (4) デイヴィッド・シウリは、パーソンズの「主意主義」を合理的行為と没合理的行為とは区別されるべき第3の行為類型を指す言葉として使用する [Sciulli 1986:747]。

合理的領域

合理的行為：有効な手段／定量可能な（経験的）諸目的

残余的な没合理的領域

主意主義的行為：象徴的手段／定性的（経験的）諸目的

(1) 実体的諸規範：規範的動機

(2) 手続的諸規範：規範的志向

没合理的行為：象徴的手段／超越的（没経験的）諸目的

- (5) パーソンズは、シュンペーターの「主観的」「客観的」という区別に疑問を持ったようである。シュンペーターの側の回想によれば、パーソンズは、客観的合理性という現象にしても、最終的には行為者の行為にまで分析が進められるべきであると主張した [Schumpeter (Swedberg) 1991:320]。とすれば、行為者の内心の合理性と社会的行為の結果の合理性とを区別する必要はないことになる。しかし、本文でも述べるが、パーソンズの後期では必ずしもそうではない。
- (6) パーソンズ自身の回想 [Parsons 1970/1977] を参照。1960年代末の大規模な大学教員調査は [Parsons & Platt 1973] に帰結した。また、HUAにはハーヴァード時代の初期にケンブリッジ市で行なった住民調査の膨大な記録が残っている [HUGFP 15.44]。
- (7) パーソンズが積極的には活用しなかった計量技法であるが、「合理性セミナー」では話題にのぼっていた可能性がある。「合理性セミナー」の他メンバーのなかで、シックルは、客観的な合理性を示す数量といえども「見かけの相関」の問題があることを指摘したと伝えられている [HUGFP 42.41]（表2の文献⑤）。専門的な経済研究では、もちろん数量的指標の分析は必須分野である。

<表2> HUAに残っている「合理性セミナー」の各レポート題目（HUGFP 42.41, Box 3, Folder : Schumpeter Seminar on Rationality 1939-1940）（以下は、フォルダの順序による）

- ①パーソンズ（Talcott Parsons）
An Approach to Analysis of the Role of Rationality（全9頁）
- ②シュンペーター（Joseph A. Schumpeter）
The Meaning of Rationality in the Social Sciences（Still only a sketch）（全34頁）
- ③ベティ（William Pettie）？ シュンペーター？

Discussions on the Meaning of Rationality in Action (全9頁)

④ムーア (Wilbert E. Moore)

The Role of Ideas in the Extension and Limitation of Rationality (全14頁)

⑤シッケル (Rainer Schickele)

The Rational Means-end Schema as a Tool for Empirical Analysis of Social Action (全25頁)

⑥マグラナン (David V. McGrannahan)

Rationality in Action (全3頁)

- (8) パーソンズ初期の行為理論にあった主観的見地が後期（主に第二次大戦後）に至って後退し、より客観的なマクロモデルに向かったと見る解釈も多い。パーソンズの生涯にわたる理論的な一貫性について論争がある [Scott 1963] [Alexander 1978]。
- (9) シンポジウムや口頭報告でのパーソンズをめぐる言説（アンチ・パーソンズ言説とでも言おうか）にいたっては、「パーソンズなどの・・・」「パーソンズに代表される・・・」という「枕詞」が頻出し、詳細なレファランスを省略することすらある。

<参考文献>

- [Alexander 1978] Jeffrey C. Alexander, "Formal and Substantive Voluntarism in the Work of Talcott Parsons : A Theoretical and Ideological Reinterpretation," *American Sociological Review*, vol.43, no. 2, 1978, pp.177-198.
- [Camic 1991] Charles Camic, "Introduction: Talcott Parsons before The Structure of Social Action," [Parsons/Camic 1991:ix-ixix]
- [Camic 1992] Charles Camic, "Reputation and Predecessor Selection : Parsons and the Institutionalists," *American Sociological Review*, Vol. 57, pp.421-445.
- [McCraw 2007] Thomas K. McCraw, *Prophet of Innovation: Joseph Schumpeter and Creative Destruction*, The Belknap Press of Harvard University Press, 2007.
- [Parsons & Smelser 1956] Talcott Parsons and Neil J. Smelser, *Economy and Society: A Study in the Integration of Economic and Sociological Theory*, Routledge and Kegan Paul, London, 1956. (訳1: 富永健一訳『経済と社会』Ⅰ、岩波書店、1958年。訳2: 富永健一訳『経済と社会』Ⅱ、岩波書店、1959年)
- [Parsons 1928/1991] "Capitalism" in *Recent German Literature : Werner Sombart and Max Weber, I*, *Journal of Political Economy*, 36, pp.641-661. [1991:3-19.]
- [Parsons 1929/1991] "Capitalism" in *Recent German Literature : Werner Sombart and Max Weber, II*, *Journal of Political Economy*, 37, pp.31-51. [1991:19-37.]
- [Parsons 1931] "Wants and Activities in Marshall," *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 46, pp.104-140.
- [Parsons 1932/1991] "Economics and Sociology : Marshall in Relation to the Thought of His Time," *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 46, pp.316-347. [1991:69-94]
- [Parsons 1935/1991] Talcott Parsons, "The Place of Ultimate Values in Sociological Theory," *International Journal of Ethics*, vol.45, 1935, pp.282-316 [Parsons/Camic 1991: Ch.18:231-257].
- [Parsons 1937] Talcott Parsons, *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*, the Free Press, Paperback edition, 1968 [1st edition, 1937, 2nd edition, 1949].
- [Parsons 1940/1954] Talcott Parsons, "The Motivation of Economic Activities," *Canadian Journal of Economics and Political Science*, vol.6, 1940 (*Essays in Sociological Theory* (Revised Edition), 1954, Ch. 3, pp. 50-68).
- [Parsons 1949/1954] Talcott Parsons, "Social Class and Class Conflict in the Light of Recent Sociological Theory," *American Sociological Review*, vol.39, 1949 (Talcott Parsons, *Essays in Sociological Theory*, revised edition, 1954, chapter XV,

- pp.323-347.)
- [Parsons 1951] Talcott Parsons, *The Social System*, The Free Press, 1951.
- [Parsons 1959] Talcott Parsons, "A Short Account of My Intellectual Development," *Alpha Kappa Deltan*, 29 (1959).
- [Parsons 1964] Talcott Parsons, *Social Structure and Personality*, New York, the Free Press, 1964.
- [Parsons 1970/1977] Talcott Parsons, "On Building Social System Theory : A Personal History," *Deadalus*, 99, 4 [Parsons 1977:22-76.]
- [Parsons & Platt 1973] Talcott Parsons and Gerald Platt (eds.) (with Neil J. Smelser), *The American University*, Havard University Press, 1973.
- [Parsons 1977] Talcott Parsons, *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, New York: the Free Press, 1977.
- [Schumpeter (Swedberg) 1991] Joseph A. Schumpeter, "The Meaning of Rationality in the Social Sciences," Joseph A. Schumpeter, Richard Swedberg (ed.), *The Economics and Sociology of Capitalism*, Princeton; NJ, Princeton University Press, 1991. (翻訳が、J・A・シュンペーター (八木紀一郎編訳)『資本主義は生きのびるか—経済社会学論集—』、名古屋大学出版会、2001年に所収。)
- [Sciulli 1986] David Sciulli, "Voluntaristic Action as a Distinct Conception: Theoretical Foundations of Societal Constitutionalism," *American Sociological Review*, Vol. 51, 1986, pp.743-766.
- [Scott 1963] John F. Scott, "The Changing Foundation of the Parsonian Action Scheme," *American Sociological Review*, vol. 28, no. 5, 1963, pp.716-735.
- [Swedberg 1991a] Richard Swedberg, "Introduction: The Man and His Work," [Schumpeter (Swedberg) 1991:3-98] (Joseph A. Schumpeter, Richard Swedberg (ed.), *The Economics and Sociology of Capitalism*, Princeton; NJ, Princeton University Press, 1991.)
- [Swedberg 1991b] Richard Swedberg, *Joseph A. Schumpeter: His Life and Work*, Polity Press, 1991.
- [Swedberg 1991c] Richard Swedberg, "Introduction to Talcott Prsons' Marshall Lectures," *Sociological Inquiry*, vol. 6, no. 1, February 1991, pp. 2-9.
- [Swedberg 2006] Richard Swedberg, "On Teasing Out Sociology from: A Brief Note on Parsons and Schumpeter," Laurence S. Moss and Andrew Sauchenko (eds.), *Talcott Parsons: Economic Sociology of the 20th Century*, Blackwell Publishing, 2006, pp.71-74.
- [大黒 2005] 大黒正伸「タルコット・パーソンズの社会理論における合理性概念の位置」『二松学舎大学 国際政経論集』第11号、2005年、109-124頁。
- [大黒 2007] 大黒正伸「パーソンズにおける「主意主義」の構想力—デイヴィッド・シウリの解釈を中心に—」『ソシオロジカ』第31巻第1・2号、2007年、53-74頁。
- [大黒 2011] 大黒正伸「パーソンズにおける経済社会学の可能性—社会システムとしての経済—」『二松学舎大学 国際政経論集』第17号、2011年、203-224頁。
- [根井 2006] 根井雅弘『シュンペーター』、講談社学術文庫、2006年。

< HUA 所蔵の未公開資料 >

- [Parsons 1940 (HUA)] Talcott Parsons, "An Approach to Analysis of the Role of Rationality," ([HUGFP 42.41: Box 3, Folder : Schumpeter Seminar on Rationality 1939-1940.]
- [HUGFP 15.2] Alphabetical correspondence, ca. 1930-1959 (28 boxes).
- [HUGFP 15.44] Cambridge Housing survey, ca. 1944 (6 containers (5 boxes and 1 pf folder).

[HUGFP 42.41] Rough drafts and manuscripts, ca. 1929-1967 (6 boxes) .

[UAV 349.11] Economics, Correspondence and Records, 1930-1961, Box: Robertson-Schumpeter.

<シュンペーターとパーソンズの関係年表>

(シュンペーターの欄は、[根井 2006 : 209-221] より抜粋)

西暦	シュンペーター	パーソンズ
1883	オーストリア＝ハンガリー帝国（当時）のトリエシュで誕生。父はヨゼフ、母はヨハンナ	
1901	ウィーン大学に入学。ベーム＝バヴェルクに師事。	
1902		アメリカ合衆国コロラド州で誕生。
1906	ウィーン大学法学博士。	
1908	『理論経済学の本質と主要内容』	
1909	ウィーン大学私講師。チェルノヴィッツ大学准教授。	
1911	グラーツ大学教授。	
1912	『経済発展の理論』	
1918	「租税国家の危機」	
1919	カール・レンナー内閣の大蔵大臣に就任。同年、内閣総辞職。	
1921	ビーダーマン銀行の頭取に就任。	
1924	ビーダーマン銀行の頭取を解任される。	アマースト大学卒業。イギリス、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに留学（～1925）。
1925	ボン大学教授。	ドイツ、ハイデルベルク大学に留学（～1926）
1926	『経済発展の理論』改訂第2版	アマースト大学（経済学）講師。
1927	ハーヴァード大学客員教授（～1928）。大学院を担当。	ハーヴァード大学経済学科講師。シュンペーターの講義を受講する。
1928		「最近ドイツ文献における資本主義－ウェーバーとゾンバルト（Ⅰ）」
1929		「最近ドイツ文献における資本主義－ウェーバーとゾンバルト（Ⅱ）」
1930	ハーヴァード大学にて計量経済学会を設立。	
1931	来日。東京商科大学（現在の一橋大学）にて講演。	ハーヴァード大学社会学科講師。 「マーシャルの思想における欲求と活動」
1932	ボン大学教授を辞任。ハーヴァード大学教授。	「経済学と社会学－マーシャルとその時代との関連」
1934		「経済学の本質と意義に関する若干の論評」
1935		「経済思想における社会学的な諸要素（Ⅰ）（Ⅱ）」、 「社会学理論における究極的諸価値の位置」
1936	パーソンズの草稿にコメント	助教授に昇進。
1937		『社会的行為の構造』
1938	計量経済学会副会長。	
1939	『景気循環論』。 ハーヴァードにてパーソンズらと「合理性に関するセミナー」を開始（～1940）	准教授、終身在職権

1940	エール大学の招聘を断る。計量経済学会会長。	「経済諸活動の動機」(F・ナイトと「経済活動の動機」について討論)。
1942	『資本主義、社会主義、民主主義』	
1944		教授、社会学科長。
1945		「社会学における体系理論の現状と展望」
1946		社会関係学科（新設）学科長
1947	アメリカ経済学会会長。	
1948	アメリカ経済学会の年次大会で、『共産党宣言』100周年記念会議を開く。 会長講演「科学とイデオロギー」	アメリカ経済学会年次大会で報告
1949	国際経済学会会長。	アメリカ社会学会会長。
1950	死去。享年 66 歳。	
1951		『行為の一般理論をめざして』(E・シルズらと共著)、『社会システム』
1953		イギリス、ケンブリッジ大学にて「マーシャル記念講演」を行う。
1956		社会関係学科長を退任。 『経済と社会』(N・J・スメルサーとの共著)
1973		ハーヴァード大学を退職。名誉教授。
1979		ミュンヘンにて急逝（5月）